

第1回（仮称）町田市里山環境活用保全計画策定検討委員会 議事要旨

【会議日時及び場所】

日時 2021年6月1日（火）10時～正午

場所 町田市役所 10階 会議室10-3～5

【出席者】（敬称略）

■委員（※はオンラインでの参加）

関司 直也（委員長）、※寺田 徹（副委員長）、※柏木 千春、老沼 敬助、大谷 賢二、狩野 真功、花形 亮一、斎藤 広志、田中 英夫、中丸 康明、山崎 凱史、伊藤 亨、※新倉 敏和

■事務局

守田北部・農政担当部長、粕川農業振興課北部・里山担当課長、牛腸担当課長、田村担当係長、喜多担当係長、浅場主任

■傍聴者

0人

【資料】

次第

（仮称）町田市里山環境活用保全計画策定検討委員会設置要綱（資料1）

委員名簿（資料2）

「（仮称）町田市里山環境活用保全計画」の策定について（資料3）（資料4）

【議事要旨】

- ・事務局から「（仮称）町田市里山環境活用保全計画」の策定等を説明した。
- ・質疑応答及び意見交換を行った。

1 開会

- ・経済観光部北部・農政担当部長からあいさつ

2 委員自己紹介

- ・各委員から自己紹介

3 委員長・副委員長の選出

- ・委員長に関司委員を選出
- ・副委員長に寺田委員を選出

4 委員長・副委員長あいさつ

- ・委員長、副委員長からあいさつ

5 議事

1. 検討の主旨（計画の目的、スケジュール等）

- ①委員 相原地区の選出のため、以前の北部丘陵の計画がわからない。概略を教えてほしい。
- ②事務局 2011年に小山田・小野路地域を中心とする北部丘陵地域（約1,000ha）を対象とした、ハードとソフトを含む基本計画である北部丘陵活性化計画を策定した。計画を策定したが、事業の主体や費用面等の課題があり、進捗しなかった。その後、2017年に北部丘陵活性化計画アクションプランを策定した。15の推進事業を2017年度から2020年度の4年間かけて進める計画であった。推進事業の半分程度は目標に達成したが、地域の方が望む事業は費用面の課題があり、進捗しなかった。新しく策定する計画では、費用面等も具体的に検討していきたい。
- ③委員長 前計画は、エリア型の計画であり、行政側も縦割りであることから、進捗は芳しくなかつ

た。新たな計画でのハード事業の位置づけは、担当する部署に実効性を持たせることが必要である。

- ④委員 市は2005年に北部丘陵まちづくり基本構想を策定したが、構想に示される施策は達成できていない。その後、北部丘陵活性化計画や北部丘陵活性化計画アクションプランを策定した。市有地の活用もほとんどできていない。過去の北部丘陵地域の経過を知らない方で、新たな計画を4回の策定検討委員会で策定することはできない。
- ⑤委員 今後の委員会の開催時間を知りたい。
- ⑥事務局 決まり次第、早急にお伝えする。
- ⑦委員 委員会の回数や検討体制を知りたい。
- ⑧事務局 委員会は全4回、14人体制で進める。
- ⑨委員長 本日オンラインで参加される方には、会議を録音したものを渡すことはできるのか。
- ⑩事務局 何らかの手法で渡すことができるように調整する。
- ⑪委員 学識経験者は本日オンラインで参加であるが、この会議に対面で参加しないと、地域の声が伝わらない。そのため、次回以降はこの場にきてほしい。

2. 骨子案の説明及び意見交換

- ①副委員長 里山とは森や雑木林だけではなく、地域の資源として考える必要がある。里山の研究は様々な観点で行われている。歴史、文化、エネルギー利用等、テーマが多様化している。資源を一体として捉えて、現代のニーズを満たす、現代版のまちだの里山を目指すことが必要。2018年度から町田市との関わりがあり、様々な資源や取組があることを認識している。コロナ禍であり、小山田緑地等にも来訪者が増えている。多摩都市モノレールの導入を検討する中でも、里山について議論している。今回、検討したいことは、里山の目標像である。委員が納得できる目標像をしっかりと議論することが必要。また、里山の保全活用についても具体的に示すことが必要。
- ②委員長 里山の将来像や活用保全方法については、丁寧に議論していくことが必要である。
- ③委員 事務局が示した里山の将来像では、全く実効性がない。動植物は残っておらず、再生もできない。田畑は荒れており、山にも入っていけない。緊急車両も入っていけないことから、今後は地域には人が少なくなってしまう。市街化調整区域での地区計画の運用指針では、土砂災害警戒区域が多く、農地転用もできない状態では、荒れた田畑や山を再生することはできない。小山田地域でも法律に則り開発はできる。北部丘陵活性化計画の策定時においても住民の声は聞かなかった。小山田地域境界は決まっておらず、市有地も50ヘクタールも活用はできていない。新たな計画の策定も4回の委員会では足りない。また、事務局が示した内容では住み続けていくことはできないため、納得できない。

- ④副委員長 地域のことを全ては知らない。計画策定の意義が問われる。計画策定に向けて、シナリオ通りではなく、慎重に議論を進めていくことが大切である。
- ⑤委員 事務局が将来像を示しているが、この内容で良いのか疑問に感じた。将来像につながるための「知る」、「訪れる」、「働く」、「暮らす」についても再度、検討して必要があると感じた。まちだの里山地域を巡り、観光の視点からも魅力を感じた。今回、観光に関する事例を準備してきたが、委員の意見も聞き、発表は控えたい。課題が山積されている状況であるので、観光の力で解決していきたい。
- ⑥委員 市は里山を残したいのか。里山がどのようにしてできたのか知っているのか。小山田地域には農家がいるため、下草刈やたい肥等を活用し、里山が形成された。今後は、里山は集約し、予算をつけて守っていかないといけない。
- ⑦委員 昔からこの地域に住んでいる。山は荒れ放題であるが、散策は好きである。新たな計画では訪れる方を増やすということであるが、奈良県でも実際に起きている、オーバーツーリズムという問題が懸念される。観光客は私有地の畑に入ってきたり、椎茸を盗んだりする方もいる。マナーを守る方が来ることは良いと思う。里山地域に暮らす住民としては、市街化調整区域、生産緑地法の制度は好ましくない。自分の土地を自由に活用できないことは問題である。新たな計画では住んでいる人にとって良い計画にしてほしい。
- ⑧委員 4点意見がある。1点目は、計画についてである。きれいな計画は実行性がない。新たな計画はどのようなになるか不安である。事業を位置付ける過程も慎重に進めていかなければならない。また、計画の実効性をどのように担保するのか、計画ができて責任はどうするのか、検討する必要がある。2点目は、計画の中心から外れている地域の取扱いである。行政から忘れられており、小野路町の中でも川崎市に近い場所では、森にはバラックがあり、人を寄せ付けないヤードがたくさんある。このような状態である中で、きれいなことを言われても響かない。3点目は、私有地の立ち入りの件である。山の頂上に住んでおり、その辺りがビュースポットとなっている。そのため、観光客が私有地に入ったりする等、嫌な思いをすることがある。地域の負担については議論がされていない。4点目は、小野路地域が全て市街化調整区域であるため負担であることである。負担が多く、メリットがない。みどりは好きであるが、好きだけでは保全はできない。山の維持管理にもお金をつけてほしい。
- ⑨委員 相原地域については、相原駅から大地沢まで約7 kmが対象となるが、行政から見放されている。フットパスコースとしても指定されている場所がある。コースを歩くために、遠方からも人がくる。モミジやイチョウ、山桜等、季節ごとに楽しめる散策コースがあるとよい。山野菜、シュンランは盗掘される。コースの途中で畑を耕しているが、無断で入ってくる人がいる。相原地域の北側は市街化調整区域となっており家は建てられない。住民に利益が出るような計画を策定してほしい。15人ほどで都立大戸緑地の整備を行っている。NPO法人も立ち上げ、公園の下草刈やトイレの清掃を行い、緑地の指定管理者からお金をもらっている。相原駅から大戸緑地までモノレールやトロッコ列車があると活性化するという。現実的に相原地域を活性化させるには、コーヒーショップ等のお店の出店や、南傾斜の地形を利

用した柑橘類の樹木を植樹することが一助になると考えられる。都立大戸緑地では、さつまいもを植えているが、都立公園のルールのため、収穫物を遊びにくる幼稚園児に配ることは禁止されている。市から都に配布できるように要請してほしい。市では小中学校の統廃合について議論されている。残すことができるように、この計画でも議論してほしい。

⑩委員

里山には直接関わっていない。三輪地域には山と一部に田がある。畑は住宅地にあり、収穫物はJAに卸している。田の保全は、地元や会の方が行っている。学校の子どもにも関わってもらっている。田の保全についても、高齢化が進み、担い手が少なくなっている。山には手が行き届いていない。山の下草刈り等を幼稚園や学校が自然を楽しみながら行っている。ほとんどが住宅地であり、今後は地元で草刈等ができるか疑問である。野鳥観察のため、カメラマンが10～20人の団体でくることがもある。また、ハイキングコースとして、鶴川駅からお寺巡りにくる方もいる。

⑪委員

第2回策定検討委員会では、大まかに事業の絞り込みを行わないといけない。地域にも利益方法を探り、良い方向に持っていきたい。方向性がまとまっていない状態では、せっかくの議論する場もつたいない。地域の生活の安定のために、住み続けられるまちにしていきたい。ある程度のインフラ整備は必要であるが、お金がかかる。採算のとれるソフトの計画と道路等のハードの計画をつくる必要がある。

⑫委員

アンケート調査の結果から、今住んでいる人の多くは大きな道路よりも、生活道路が必要であると考えられる。市有地は半分程度活用していると言っているが、間違っている。市は生活道路整備をせず、農地農道整備を行っている。広い道路の沿道の一部活用すると全体が良いまちとなる。国の特区制度を活用すれば、区画整理事業を実施することができる。優良田園住宅の建設の促進に関する法律では、6m道路があれば、300㎡程度の住宅や別荘が建築できる。しかし、この法律は議員立法であることから、行政は進んで利用していない。市街化調整区域の地区計画の運用も実際にはできない。土地を活用できるようにしてほしい。山は金にならない。区画整理事業を実施するにも土地の境界が決まっていない、区画整理事業が1番大切である。市街化調整区域での区画整理事業は市が主体でないと実施できない。

⑬委員

里山交流館の来訪者は昨年度、2か月程度休館であっても、年間で2万6000人程度来館した。コロナ禍で遊ぶ場所がないことから、近隣の住民も来館する方も増え嬉しい。里山交流館が出来て、8年が経過した。できるだけ、地元の方と関わりながらつくった。ジャガイモや小麦を地元の農家に提供してもらえるようお願いしている。提供されたものは全部購入している。農家にとって迷惑にならないように進めている。里山交流館は施設の規模が決まっているので、今後のことを考えると、来館者はいるけれど、野菜が足りなくなることが想定される。将来のことを考えて、椎茸の植菌体験として山を整備したり、ナラ枯れの材を薪として利用したりする等、地元にも貢献していきたい。この委員会の目的を達成するには、できない事は捨てる、できる事は何か、小さな案件でよい、成功させる事が第一です。どのようにしたら里山交流館が繁栄するのか考え、うどんやコロケの販売に留まらず、焼き菓子や漬物を販売することで、売り上げがある程度確保できるようになってきた。これは必要な考え方かもしれない。お手伝いにはお金を払うことが大切、ボランティアではいけな

い。この考えを運営に取り入れることが大切である。

⑭委員

将来像の実現のために里山を知る、訪れることは理解できる。働くや住むことについては想像ができない。生まれは秋田県の男鹿市であり、なまはげが有名で観光客が訪れる。秋田県は米どころであるが、次の世代の方は経済的にメリットが少ないため続かない。観光客で人を呼び込むことは必要である。持続性を考えないと、その場しのぎとなり閑散としてしまう。コロナ禍で、山や畑でのワーケーションが注目を集めている。継続的に里山を活かすことを考えていく必要がある。ボランティア依存では長続きしない。難しいと思うが、働き、暮らし、里山を循環する仕組みをモデルケースとしてつくってほしい。

⑮委員

小野路の農家出身である。若い世代が外に出ていくのが現状である。就農年齢は60歳以上が80%である。現役を引退してから農業を始める人が多くなっている。山の管理をしたことはない。これからは守らないといけないと思っている。山の管理の仕方やどのようにすれば良いのか困っている人もいると思う。

⑯事務局

地域の方との対話が足りていないと感じた。今後も丁寧に対話を続けていきたい。策定検討委員会の回数が4回では少ないと感じているため、各団体の会合には参加していきたい。頂いた意見の全てを答えることは難しい。住んでいる人の暮らしが守られていることが大前提である。アクセス、環境等、市としても対応できていないことを痛感している。今後、地域の会合に参加し、担当する部署にはしっかりと伝える。里山環境の持続性については、経済的にお金が回る仕組みをつくる必要があるとあり、地域やボランティアでは限界であるため、様々な団体に関わってもらい進めていくが必要である。環境や景観についても、防災や治安面について考慮しながら進めていく。計画の実効性については、丁寧な議論が必要であり。計画策定後についても、進捗管理をする仕組みをつくり、何が問題であったのが振り返ることが必要である。

⑰委員長

本音ベースで意見を伺うことができた。様々な地域課題があり、里山を循環する仕組みをつくることや事業を絞り込むことも必要であることを感じた。何を議論するのか、他部署との橋渡しはどのようにするのか、ここで議論することは限界であるとの意見もあった。生活の課題では、最初に共有する必要がある。次回の策定検討委員会では何を集中的に議論するのか絞る必要がある。土地利用やインフラ整備の制度に関連することは、どの程度、この場で議論するのか、場を変えることも最初に示す必要がある。実効性のプロセスについても、どのように位置づけるのか、計画でのPDCAサイクルは、前回のアクションプランでは曖昧であったため、検討する必要がある。里山が残っている地域の端では、行政が見ていないので、やりとりできないとの意見もあった。議論のスタートラインについて、対話の場を設けることが必要。里山の可能性や大切であるとの意見が聞くことができたので安心していい。外部との場の持ち方、ルールを共有していくことが大切である。里山のPRよりもうまく外部の方を内部に馴染ませる仕組みづくりが必要である。実効性も検討が必要であり、ボランティアだけでは限界がある。地域に向き合いながら議論していくことが必要である。

6. その他

①委員

計画の業務を手伝っているコンサルタントには、基本的に今までの内容を変えていかないと

成立しないことを伝えてほしい。今回の意見を取り入れないといけない。

②事務局

委員長ありがとうございました。また、委員の皆さまも貴重なご意見ありがとうございました。なお、本日は会場の時間の関係で、ご意見の集約ができていないかもしれません。もし、ご意見等ございましたら、後日でも構いませんので、お電話・メール・ファクス等でご連絡いただければと存じます。また、後日本日の議事要旨をお送りしますので、ご確認をお願いします。最後に、事務局から、次回の日程についてご連絡いたします。次回、第2回策定検討委員会は2021年8月3日（火）開催を予定しております。また近くなりましたらご通知いたしますので、是非、ご参加をよろしく願いいたします。

次回の策定検討委員会では、今回のご意見を参考に「骨子案」を修正し、骨子を基に作成した計画（案）について、ご意見をいただきたいと考えております。

本日は、お忙しいところ貴重なお時間をいただきありがとうございました。

7. 閉会

・事務局からあいさつ